

## 能「野宮」鑑賞のポイントと詞章

作者／世阿弥

季節／秋（陰曆九月）

所／山城国野宮

### 出典は源氏物語

能「野宮」は『源氏物語』の賢木の巻を主材として作られています。

賢木の巻では、光源氏がかつて思いを寄せた六条御息所をはるばる野宮まで訪ねるところが語られています。御息所は、光源氏と疎遠になった後、思いを断ち切るために、伊勢神宮の斎宮となる娘に付き添って野宮に来ています。野宮は、この世の汚れを清める潔斎の場ですが、そこまで光源氏はやってきて、御息所への思いが全く無くなったのではないと未練を語ります。そして、二人の間でいくつかの歌が交わされます。

神のように変わらぬ私の心を道標に、神垣を越えてきたのに冷たくされるのですね、と言う源氏にたいして、

「神垣はしるしの杉もなきものをいかにまがえて折れる榊ぞ」（御息所）

（ここ野宮には、道標となる杉もないのに、どう間違えて折った榊なのでしょう）

と御息所は歌で応えます。また、ついに伊勢に向かってしまふ御息所に、

「ふりすてて今日は行くとも鈴鹿川八十瀬の波に袖はぬれじや」（光源氏）

（私を振り捨てて発たれても、鈴鹿川を渡る時には、八十瀬の川波に袖が濡れるように後悔の涙を流されるのではありませんか）

その返しの歌は、

「鈴鹿川八十瀬の波にぬれぬれず伊勢まで誰か思ひおこせむ」（御息所）

（八十瀬の波で袖が濡れるか、私が後悔の涙を流すか、誰が思いやってくれるでしょう）

こうした二人の心情を表す歌が、能「野宮」の詞章には散りばめられています。事前に詞章と現代語訳にお目通し頂くと、能をより深く味わっていただけたらと思います。

### 鬘物としての大曲―本三番目能

「野宮」は鬘物（女性を主人公とした能）の中でも大曲で、本三番目能とされています。

本三番目とは、太鼓の入らない序ノ舞が舞われますが、そうした形式だけではなく、高貴な女性の心情を深く掘り下げている曲目になります。

六条御息所は知性と教養にあふれる魅力的な女性。そのように聡明で高貴な身分の女性が寂しい境遇に置かれた時の心情、心の奥底の妄執をどう表現するかが問われる演目です。

演能終了後、シテ・友枝雄人師と歌人・馬場あき子氏、評論家・青柳恵介氏による鼎談で、本三番目能の魅力を様々な角度から深く掘り下げますので、ご期待ください。

ワキ

これは一所不住の僧にて候 我此程は都に候ひて 洛陽の寺社残り無く 拝み廻りて候 又秋も末つ方になり候へば 嵯峨野の方ゆかしく候程に 只今西山へと志し候

これなる森を人に問へば 野の宮の舊跡とかや申し候程に 立ち寄り一見せばやと思ひ候

我此の舊跡に来て見れば 黒木の鳥居小柴垣 昔に変らぬ有様なり かかる時節に参り合ひて 拝み申すぞ有難き

伊勢の神垣隔て無く 法の教の道直に ここに尋ねて宮所心も澄める夕べかな心も澄める夕べかな

シテ

花に馴れ来し野の宮の 花に馴れ来し野の宮の 秋より後は如何ならん 折しもあれ物の寂しき秋暮れて 猶凋行く袖の露 身を碎くなる夕間暮心の色はおのづから 千種の花に現れて 衰ふる身の 習かな

人こそ知らね年々に昔の跡に立ち歸り 野の宮の森の木枯秋更けて 森の木枯秋更けて 身に沁む色の消え返り 思へば古を何と忍ぶの草衣 来てしもあらぬ假の世に往き還るこそ恨なれ往き還るこそ恨みなれ

ワキ

我此の森の陰に居て古を思ひ 心を澄ます折節に いとなまめける女性 一人忽然として来り給ふは 如何なる人にてましますぞ

シテ

如何なる者ぞと問はせ給ふ そなたをこそ問ひ参らすべけれ これは古齋宮に立たせ給ふ人 假に移ります野の宮なり 其後は此の事絶えぬれども 昔を思ふ年々に 人こそ知ら

ワキ

私は諸国見物の僧です。都の名所旧跡を見物したので、秋も深まり趣のある嵯峨野を訪ねてみようと思う。この森はと尋ねると野宮の旧跡だという。通りがかりの縁ながら参詣しよう。旧跡というのに、

黒木の鳥居や小柴垣など、昔のままなのはどうしたことだろう。何にせよ、参詣できるのはありがたいことだ。伊勢の神宮は神仏を隔てる事は無い。心が澄むような夕べだ。

シテ

かつて美しい花々を眺めて過ぎてきたが、野宮の秋が去り花の散った後はどんなに淋しいだろう。涙が袖を濡らし悲しさが心を苦しめる。

美しかった秋草が枯れ萎むように、それが人生の習わしと 言うものだろう。

人知れず毎年この日、野宮の旧跡に帰ると、木枯が吹き、身も消え入るばかり。昔を思うよすがはどこにも無いのに、この世、あの世を歩きき するのは恨めしいことだ。

ワキ

昔を思い心を澄ましている と、突然美しい女性が現れた。一体あなたはどのような方でしょう。

シテ

そう尋ねるあなたこそどうい う方ですか。ここは昔齋宮に 立たれた方が仮に移られる野宮。その後、絶えてしまいましたが、人知れず毎年この宮

ね宮所を清め 御神事をなしさむら  
ふ所に 行くへも知らぬ御事なるが  
来り給ふは憚り有り 疾く疾く歸  
り給へとよ

ワキ いやいやこれは苦しからぬ 身の行  
末も定め無き 世を捨人の數なるべ  
し さてさてここは古りにし跡を今  
日毎に 昔を思ひ給ふ 謂はれは如  
何なる事やらん

シテ 光源氏此處に詣で給ひしは 長月七  
日の日今日に當れり 其時いささか  
持ち給ひける榊の枝を 忌垣の内に  
挿し置き給へば 御息所取敢へず  
「神垣はしるしの杉も無きものを  
いかにまがへて折れる榊ぞ」と

ワキ 詠み給ひしも今日ぞかし  
げに面白き言の葉の 今持ち給ふ榊  
の枝も 昔に変わらぬ色よなう

シテ 昔に変わらぬ色ぞとは 榊のみこそ  
常盤の陰の

ワキ 森の下道秋暮れて

シテ 紅葉かつ散り

シテ／ワキ 浅茅が原も

地謡 末枯の草葉に荒るる野の宮の 草葉  
に荒るる野の宮の 跡懐かしきここ  
にしも 其の長月の七日の日も今日  
に廻り来にけり 物儂しや小柴垣い  
とかりそめの御住まひ今も火焚屋の  
微なる 光は我が思内にある色や外  
に見えつらん あら寂し宮所あら寂  
し此の宮所

ワキ 尚尚御息所の御事委しく御物語候へ  
地謡 抑抑此の御息所と申すは 桐壺の帝  
の御弟 前坊と申し奉りしに 時め  
く花の色香まで妹背の心浅からざり  
しに

を清め、御神事をしているの  
です。どこの誰とも分からな  
い人がお出でになるのは恐れ  
多い、早々にお帰りなさい。

ワキ いえ、私は世間を捨てた僧の  
一人です。ここは古い旧跡な  
のに、毎年この日に、昔を思  
い出す謂れとは何ですか。

シテ 光源氏がここにお出でになっ  
たのが今日のこの日。榊の枝  
を社の垣の内に挿して置かれ  
たので、御息所は「神垣はし  
るしの杉もなきものを、いか  
にまがえて折れる榊ぞ」と詠  
まれたのです。

ワキ なんと面白いお話だ。あなた  
が持っている榊も昔と変わら  
ない色ですね。

シテ 昔に変わらぬのは常盤の色  
をした榊だけ。

ワキ 森の下道は秋が過ぎると、

シテ 紅葉が散りはじめ、

シテ／ワキ 浅茅が原も。

地謡 野宮の辺りは荒れ果ててしま  
ったが、懐かしいこの旧跡に  
今日も九月七日が巡ってきた。  
小柴垣を巡らしただけの  
仮の住まいだが、今も火焚屋  
には微な光が燃えている。私  
の心の内が外に現れ見えない  
かと氣遣われる。何と寂しい  
ことだろう。

ワキ もっと御息所のお話を聞かせ  
てください。

地謡 御息所と申す方は、桐壺の御  
弟、前の東宮と結ばれ、仲睦

シテ 會者定離の習もとよりも

地謡 驚くべしや夢の世と 程無く後れ給ひけり

シテ さてしもあらぬ身の露の

地謡 光源氏のわりなくも忍び忍びに行き通ふ

シテ 心の末のなどやらん

地謡 又絶え絶えの仲なりしに

つらきものにはさすがに思ひ果て給はず 遙けき野の宮に分け入り給ふ御心いと物哀なりけりや 秋の花皆衰へて 蟲の聲もかれがれに松吹く風の響までも 寂しき道すがら秋の悲も果て無し かくて君ここに 詣でさせ給ひつつ情をかけて様々の言葉の露も色々の御心のうちぞ哀なる

シテ 其後桂の御祓

地謡 白木綿かけて川波の 身は浮草の寄

るべ無き心の水に誘はれて 行くへも鈴鹿川八十瀬の波に濡れ濡れず 伊勢まで誰か思はんの 言の葉は添ひ行く事も例無きものを親と子の多祢の都路に赴きし心こそ恨なりけれ

シテ げにや謂はれを聞くからに ただ人ならぬ御気色其の名を名宣り給へや 名宣りてもかひ無き身とて恥づかしの 洩りてやよそに知られましよ しさらば其の名も亡き身ぞと申はせ給へや

地謡 亡き身と聞けば不思議やな さては

此の世を儂くも

シテ 去りて久しき跡の名の

地謡 御息所は

シテ 我なりと

まじく過ごされたが、

シテ 会うは必ず別れが世の習い。

地謡 御息所は東宮と死別された。

シテ さてもこの世は儂いもの。

地謡 その後、光源氏が無理に恋をしかけ、内々に通われた。

シテ しかし人の心は変わるもの。

地謡 やがて源氏の足は遠のかれてしまつたが、御息所への思いが全く無くなつたのではなく、秋の花は皆枯れ、虫の声は絶え絶えで、松に吹く風の音ももの寂しい野宮を遙々訪ねられ、情のこもつた言葉をかけられた。源氏の心中は哀れ深いものだった。

シテ その後、御息所は桂川で御祓をされたのです。

地謡 その時の白弊を流した浮草のように、頼る人も無く、伊勢に下られた。母が齋宮に付き添つて行く前例は無く、心は恨めしいばかりだった。謂れを聞くとただのお人ではない。どうぞお名前を名のつてください。

シテ 名のつてもかひの無いこと。いつかは世間に知られるかもしれないが、この世に無い者と思つて回向してください。

地謡 不思議なことだ。それではこ

の世を儂くも去られた、

シテ 去つて長い年月が経つた、

地謡 御息所とは、

シテ 私なのです。

地謡

夕暮れの秋の風 森の木の間の夕月  
夜 影幽かなる木の下の 黒木の鳥  
居の二柱に 立ち隠れて失せにけり  
跡立ち隠れ失せにけり

(中入り)

ワキ

片敷くや森の木陰の苔衣 森の木陰  
の苔衣 同じ色なる草蓆 思をのべ  
て夜もすがら彼の御跡を弔ふとかや  
彼の御跡を弔ふとかや

シテ

野の宮の 秋の千種の花車 我も昔  
に 廻り来にけり

ワキ

不思議やな月の光も微かなる 車の  
音の近づく方を 見れば網代の下簾  
思ひかけざる有様なり 今は疑ふ所  
も無く 御息所にてましますかさも  
あれ如何なる車やらん

シテ

如何なる車と問はせ給へば 思ひぞ  
出づる其の古 賀茂の祭の車争主は  
それぞと白露の

ワキ

所狭きまで立て竝ぶる

シテ

物見車の様々に殊に時めく葵の上の  
ワキ 御車とて人を払ひ 立ち騒ぎたる其  
中に

シテ

身は小車の遣る方も無しと答へて立  
て置きたる

ワキ

車の前後に

シテ

ばつと寄りて

地謡

人々轅に取附きつつ人だまひの奥に  
押し遣られて物見車の力も無き身の  
程ぞ思ひ知られたる よしや思へば  
何事も 報の罪によも洩れじ 身は  
猶牛の小車の廻り廻り来ていつまで  
ぞ妄執を助け給へや妄執を助け給へ  
や

地謡

そう言うと、夕暮れの風が吹  
き、森の木陰から夕月が幽か  
に光り、美しい女性は黒木の  
鳥居の柱に隠れて姿が見えな  
くなくなってしまった。

(中入り)

ワキ

森の木陰に、僧衣の片袖と  
衣と同じ色をした草むしろ  
を敷き、御息所の回向をし  
よう。

シテ

昔を思い出し、野宮に咲き  
乱れる花のような美しい車  
に乗ってやってきました。

ワキ

不思議だ。幽かな月の光の  
中、車の近づく音がする。  
網代車に下簾の立派な車。  
やはり御息所なのですね。  
それはどういう車ですか。

シテ

問われて思い出すのは賀茂  
の祭りの争い。車の主が誰  
とも知らず、

ワキ

車が隙間なく立ち並び、

シテ

その中に葵の上の車が、

ワキ

人々を払い除け騒ぎ立て、

シテ

私は車を引き退ける所もな  
いとそのまま立て置くと、

ワキ

車の前後に、

シテ

ばつと寄ってきたのです。

地謡

人々が車に取り付き奥に押  
しやられても対抗出来なか  
った情けない身の上も、前  
世の報いなのだろう。こう  
していつまでもこの世に戻  
ってくる迷いを晴らしてく  
ださい。

シテ 昔に歸る 花の袖

地謡 月にとかへす 気色かな

〔序ノ舞〕

シテ 野の宮の 月も昔や 思ふらん

地謡 影寂しくも森の下露森の下露

シテ 身の置き所もあはれ昔の

地謡 庭のたたずまひ

シテ よそにぞかはる

地謡 気色も假なる

シテ 小柴垣

地謡 露打払ひ訪はれし我も其の人も

唯夢の世と古り行く跡なるに誰松蟲

の音は りんりんとして風茫茫たる

野の宮の夜すがら 哀なり

〔破ノ舞〕

ここはもとより忝くも神風や 伊勢

の内外の鳥居に出で入る姿は生死の

道を 神は受けずや思ふらんと

又車に打乗りて火宅の門をや出でぬ

らん火宅

シテ 華やかだった昔を思い、

地謡 この月夜に舞いましょう。

〔序ノ舞〕

シテ 野宮に照る月も昔を忍ぶ、

地謡 寂しい影を森の下露に映し。

シテ ああ、思えば昔は、

地謡 この庭の気色は、

シテ 余所と違って、

地謡 勝れていた。

シテ 仮に作った小柴垣、

地謡 その露を払って訪ねてくれた

源氏の君も私も、皆夢の跡。

今はただ松虫がりんりんと鳴

き、風はざわざわと吹いてい

るばかり。

〔破ノ舞〕

ここは忝くも伊勢の内宮外宮

をお祀りした所。その鳥居を

出たり入ったりしている姿

は、生死の世界にさ迷ってい

る者のように見えるだろう。

それでは神もご納受くださら

ない。と、また車に乗り去っ

ていく。今は迷いの世界から

離脱していったのだろうか。